

1 <sup>しがなおやきゆうきよ</sup>志賀直哉旧居（奈良学園セミナーハウス） 3棟 [有形文化財（建造物）]

- ・主屋 木造、建築面積 361 m<sup>2</sup>、平家一部2階建、棧瓦葺、昭和4年(1929)建設
- ・表門 木造、間口 1.9m、棟門、棧瓦葺、昭和4年頃建設
- ・塀 土塀、延長 156m、棧瓦葺、昭和4年頃建設

[所在地] 奈良市高畑町 1237 番地 2

[所有者] 学校法人奈良学園

[概要]

志賀直哉旧居は、直哉が自ら構想し、京都数寄屋大工の下島松之助が昭和4年に竣工させた住宅である。直哉が昭和13年に転居した後は個人に売却、戦後は進駐軍に接收された。返還後の昭和28年、厚生省が買収し厚生年金保養施設として利用していたが、昭和50年代に老朽化のため建替えが計画された。近隣住民を中心として保存運動が展開され、昭和53年に永年保存を目指した奈良学園がセミナーハウスとして買収した。

敷地は旧春日社家郷のうちにあり、四周を土塀で囲み、北側西寄りに棟門形式の表門を構える。主屋は北・西・南・東棟の4棟をコ字形に配す。主屋の中心は南棟に設けられた食堂とサンルームで、直哉を慕って奈良にあつまった文人達の交流の場であった。食堂は洋間で板敷き、東側にソファを造り付ける。一段床を下げたサンルームは瓦製の四半敷とし、天井は張らず架構を見せ、棟際に採光窓を開く。食堂とサンルームの意匠は数寄屋造を基調とし、近代的な洋風意匠を加えるが、各要素は破綻なく調和している。

奈良県内の近代住宅建築は純然たる洋館や洋室を設けずに、全体構成は和風を主とし、和洋折衷の部屋を内に組み込むものが多い。旧居はこの特徴を示す代表例であり、県内近代和風建築の形成を示す貴重な遺構として重要である。



志賀直哉旧居内部、主屋サンルーム、西南より。向かって左奥が食堂。